

公孫樹

東京都立
豊多摩高等学校
令和6年3月
第63号
東京都杉区
成田西2-6-18
TEL 03(3393)1331



「深く考え、ともに行動できる人に」

学校長 板倉 和則

「学校は社会の縮図である」と言われます。これは、学校は単に学問を習得する場ではなく、社会の関係性や責任を学ぶ場でもあることを意味します。ここをしっかりと押さえた上で、学校というものを捉えてみましょう。学校評価アンケート結果から考えてみることにします。今年も、さまざまな意見や要望が寄せられました。

授業について、生徒の満足度は84%でした。日々の授業のわかりやすさ、興味関心、教え方の工夫など、複数の項目に占める割合です。一方、教員はというと、わかりやすい授業、興味関心を高める授業を行っているかという設問に対して肯定意見が97%となっています。生徒と教員の意識に差があるのはなぜでしょうか。

自動販売機に食品を入れてほしいという要望。学校は自販機のオーナーとして利益を得るのではなく、場所を提供しているにすぎません。こうした業者は単価を下げて販売活動を行っています。人件費、電気代、輸送費等の諸経費と利益の関係はいかに。食品が売れなければどうなるか、また賞味期限の長い食品を入れることの是非は。

裏門を下校時にも開放してほしいという声。裏門は安全管理上の問題から、登校時以外閉鎖しています。時間をどう設定するか。登校は朝の三十

に集中するので対応可能ですが、下校時は何時に開けて、何時に閉めれば安全との両立を図れるでしょうか。そしてそれを誰が行うのか、何人くらの生徒にメリットがあるのかという経営的な問題もあります。

よりよい環境を追求するのは当然のことです。だからと言って単純に、ではこうしようとか、逆にそんなことは無理だなどと一刀両断に切り捨てることもできません。いろいろと考えることが重要です。ひとつの問題に対して、さまざまな課題があることに気づいていただけだと思います。自分が快適な生活をするために誰かにサービスを求めるだけではいけません。自主自律を志す学校の一人として、深く考え、ともに行動していきたいと強く願わされています。

Touch the Sky! TOYOTAMA!

「黒海の彼方に」

副校長 昆野 弘幸

ロシア軍がウクライナに侵攻して始まった戦闘は、ほぼ二年たった現在もまだ続いています。一日も早い収束を願うばかりです。

ウクライナという国名を聞いて思い出すことがあります。私が以前勤めていた学校で、国際理解教育の一環として「留学生が先生！」という教育

プログラムが実施されていました。このプログラムは、日本で学ぶ外国人留学生を講師として招き、母国の人々の生活や文化、日本に留学した理由、講師自身が学んでいること、将来の展望や夢などを語っていただくという企画でした。当時、私が学級担任をしていたクラスの教壇に立った講師が、ウクライナから来た留学生だったのです。彼女はウクライナの首都キーウ（当時は「キエフ」と呼ばれていました）の大学で日本語を学び、来日して日本の大学院で日本語教育を専攻していました。流暢な日本語で、ウクライナの風土や伝統・習慣など興味深いお話をたくさんしていただきました。また、クラスの代表生徒の一人にウクライナの民族衣装を着せてくださったこともよく覚えております。私は教室の後ろから講師と生徒たちのやりとりをずっと見ていました。講師の朗らかなお人柄のせいもあつたかもしれませんが、生徒たち全員が楽しそうな表情でお話に聴き入っていました。おそろくそれまでウクライナという国を意識したことはあまりなかったであろう生徒たちが、確かにこの国に関心をもち、この国のことを知ろうとしていました。短い時間ではありましたが、間違いなく貴重な時間でした。多様化が進むこれからの国際環境において、異文化理解はより重要性を増していきま

す。国は違えど、同じ地球に住む仲間として共生できる力を



身につけていきたいものです。

さて、私はボスポラス海峡から黒海へつながるトルコ領内のある場所を訪れたことがあります。古い要塞跡が残る小高い丘の上から黒海の入口を一望できる場所です。そのときは深く考えもしませんでした。目の前に広がっていた黒海の水平線の彼方にはウクライナやロシアがあるのです。今、その光景を瞭に浮かべながら、改めて平和を念じました。そして、先述の彼女は今ごろどうしているのだろうか……ふとそんなことを思ったりしました。

「ある答辞」

生徒保健部 今井 一雄

すごい答辞を読んできました。東京にある私立桐朋高校の卒業式での答辞である。先日行われた本校での卒業式の答辞も素晴らしいものであった。しかし、この答辞は十八歳の若者が記したものであることが信じられず、何回も読みなおしてしまい、そのたびに今回この原稿を申請け合いました。また後悔させてしまうものであった。詳細は省くが、知性に溢れ、さまざまな語彙を駆使して高校生活を振り返りながら、あくまで若者らしく自身の想いを表現している。天邪鬼な私はこの生徒会長と思われる人物の高校生活、どのような過ごし方をしていたか、もっと知りたいという思いに駆られてしまった。

ひとつのエピソードとして生徒会の意見箱に、右翼や左翼といった言葉を使って、特定の政治的思想を中傷するものが投書されていたことがあげられている。どう返信しようか悩み、そのまま机

に置いて帰った翌日、誰の字か不明であるが、「片方の翼だけでは、鳥は空を飛べません」と書かれていたそうである。なんとというパランス感覚、ウィットに富んだ表現である。この学校では日常の学校生活でこのような考え方、会話が飛び交っているのだろうか。

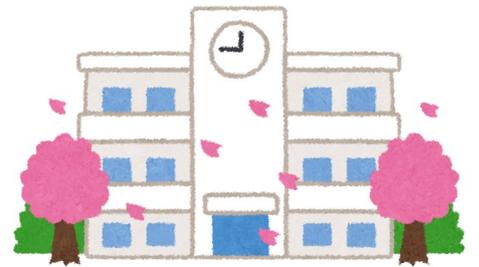
今年も多くの中学生が本校の入学選抜試験を受験してくれた。推薦試験の面接ではこぞって「自主自律」「自由な校風」というワードを口にして目をキラキラさせていたが、入学後にもその目の輝きを失わないでいてもらいたいものである。在校生にも残りの学校生活の中で、自分の中で素晴らしい答辞を書くことができるように過ごしてもらいたいと切に願っている。

部室に教科書やプリントを山のように破棄して菓立った卒業生を説教するために呼び出した朝に記す。

「自分の進むべき道を見出す方法について」

進路図書部 狩野 仁司

三年生になってもやりたいことが見つからない、進路が選択できないという人も少なくないと思います。ところが、新課程に切り替わって、一年生のうちに文系か理系かの選択を迫られるようになります。ますます悩ましいことになりました。そこで、自



分の進路を考える方法を三つ提示しておきたいと思います。

一つは学校の授業をしっかりと聞くことです。本校ではほぼ全員が大学進学をめざしています。大学で学ぶ学問は、すべて高校の授業の内容の延長にあります。ということは、高校の授業を受けている中で、自分が最も前向きに取り組める授業の延長線上に自分が進むべき道がある可能性が高いのです。それゆえ最初から苦手意識を持ったり、食わず嫌いをしたりせずどの授業にも前向きな気持ちで取り組んでみたらいかがでしょうか。

二つ目は、世の中の動きに目を向けること、すなわち日々のニュースに関心を持つことです。「進路を考える」というのは、世の中にどのようなことが起きているかを考えるということでもあります。それゆえに、新聞やTVのニュースを見て、世の中の動きを知り、自分がどこからどう世の中に飛び込んでいこうかを考える、その延長線上に学部・学科を考えるとというアプローチも思いいます。三つ目は本を読むことです。一つのジャンルを深めていくのもよし、いろいろなジャンルの本を読んでいくのもよし、そうやって本を読んでいく中で、「おもしろい!」と思えるものが見つかり、自分の興味・関心の所在がわかっていくはず。進路について考えることは面倒だし、今述べた三つの方法を実践するのも、慣れない人にとっては一歩一歩大変でしょう。しかし、進路を考えると言うことは、これからの長い人生をどう生きていくかを考えることであり、けっして他人(親も含めて)任せにできることではありません。自己の進路で悩んでいる人は、ここにあげた三つの方法をぜひ実践してみてください。